



SOS 子どもの村
JAPAN

vol. 014

2019年12
December

News Letter

すべての子どもに愛ある家庭を

みんなで里親プロジェクト
特別編集版

みんなで里親プロジェクト

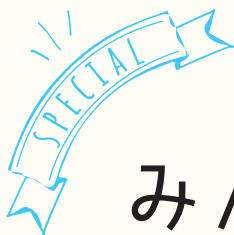
● 里親チャット座談会

「短期の里親が、子どもを預かり家族を支援するために」

● 世界の子どもたちの村から「シリア」「コロンビア」

● 子どもの村福岡村長 山元真哉さん

● SOS ニュース



みんなで 里親プロジェクト

みんなで
里親
ふくおかし西区 project

「みんなで里親プロジェクト」とは、子ども家庭支援センター「SOS子どもの村」（以下、子家セン）が、福岡市西区や福岡市児童相談所などと共に取り組んでいるプロジェクトです。福岡市西区を中心に、里親の理解を広め、特に子どもショートステイ（※）をして下さる短期の養育里親のなり手を増やしたりしていくことに、日々取り組んでいます。

困難を抱える子どもと家族を 地域で支える仕組みをつくろう

常務理事 坂本雅子

子どもの村の二つの活動

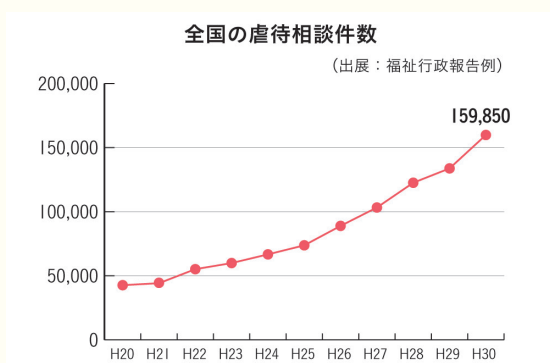
「SOS子どもの村JAPAN」は、福岡市で児童相談所と「子どもNPOセンター福岡」の協働の里親普及支援事業「新しい絆プロジェクト」から生まれました。「すべての子どもに愛ある家庭を」をスローガンに、世界に広がる「SOS子どもの村インターナショナル」の日本法人として、2010年に西区今津に「子どもの村福岡」を開村し、5軒の家族の家で子どもたちのための「里親による代替養育」とその支援プログラムを開発してきました。さらに、2013年からは、地域の中で養育に困難を抱える子どもと家族のために、「子ども家庭支援センターSOS子どもの村」を開設し、①「休日夜間の相談事業」②「里親さんの研修」③子どもの村での地域の子どものための「短期預かり（子どもショートステイ）」を始めました。



子どもの村福岡（福岡市西区今津）

地域で暮らす子どもと家族の厳しい状況

幼い子どもたちが虐待やネグレクトで死亡する悲しいニュースが後をたちません。貧困、親の病気や育児不安などの困難に加えて地域の中での孤立を背景に、子どもの養育に困難を抱える家族が増え続けています。厚生労働省の発表によると、2018年度、子どもの虐待相談は約16万件に達しました。



しかし、相談された子どもの95%は、その後、地域に戻って、実家族とともに生活しています。子どもの村福岡では、児童相談所からの「一時保護」の子

子どもショートステイ（※）：育児疲れや病気などで、家族が一時的に養育困難になった時に、家族が申し込みをし、乳児院や児童養護施設などで、短期間預かるサービスです。福岡市では、施設だけでなく里親さんも預かることができるようになっています。



どもや「子どもショートステイ」の子どもの短期預かりを受け入れてきました。子どもたちが困難な状況になった時、安心して暮らしていけるように、地域でできることはないだろうか。児童相談所に虐待相談や一時保護される前に、地域で子どもを一時的に預かることで、虐待の予防や長期に親子が離れて暮らすことを防ぐことができないだろうか。「みんなで里親プロジェクト」は、そのようなみんなの思いから始まりました。

地域で子どもたちのためにできること

子家センでは、まず、子どもの村福岡のある西区役所に相談し、福岡市児童相談所とも協働で、身近な小学校区で子どもたちを短期間預かってくださる里親さんを増やし、里親さんが地域で子どもを預かる具体的な仕組みづくりを始めることになりました。西区の子育て支援課、地域保健福祉課、福岡市の児童相談所、社会福祉協議会、里親会、西区民生児童委員それに九州大学田北研究室などで「みんなで里親プロジェクト会議」をつくり、「みんなで里親を理解する」「みんなで里親のなり手を増やす」「みんなで里親養育のチームになり、親子を支える」を合言葉に、西区で短期間子どもたちを預かってくださる里親さんを増やすことから始めました。

子どもショートステイは、 子どもと家族を支える切り札

ソーシャルワーカー 永井里美

相談事業の現場で感じたこと

子家センでは休日や夜間の相談事業も行っています。その中で出会うご家族は、共働きやひとり親、障がいや病気を抱えながらぎりぎりの状態で「子どもとの関係やさまざまな課題を何とかしたい」という思いをもって相談に来られます。

私は、社会福祉士として高齢者の相談に従事

していました。相談者の希望を伺い、本人に必要なと思われる介護サービスや地域の社会資源を調整し、生活の安定を図っていました。その経験から、高齢者の支援に比べて子ども家庭福祉の分野は、「サービスが少ないし利用しにくい」ということを痛感しました。

子どもの村福岡でのショートステイ

子どもの村福岡では、里親家庭で里子を育てるとともに、「短期の預かり」も行っています。しかし、受入れには限界があり、申し込みに十分応えることができませんでした。また、ショートステイ制度では、家族は遠くの施設まで子どもを預けにいかねばならず、また施設で生活する数日間、子どもたちは保育園や学校を休まなければならないのです。もっと利用しやすい制度にすることも必要だと感じています。

ショートステイは「在宅支援の切り札」

福岡市は転勤世帯も多く、今まで頼りにしていた実家と離れて孤立する家庭が多い都市です。また、ひとり親世帯も増えており、育児疲れを理由としてショートステイを利用される方が増えています。

子どもショートステイは、親が申請し利用できる子育て支援サービスで、行政処分である児童相談所の「一時保護措置」とは異なります。例えば、親が何人かの子どもを抱え、また障がいがある子どもとの毎日で育児疲れで睡眠不足…子どもに優しくできない。きつい。少しでも休みたい…と思うような時に、親自身が相談し、1~7日間程度、お泊りが可能な預かりサービスです。利用者(親)の意向が尊重されることに大きな意味があります。また、必要な時に繰り返し利用できるという強みもあります。

子どもショートステイを身近で利用しやすい制度にしたい…そういった想いを持って、「みんなで里親プロジェクト」の里親チームは活動しています。



里親チーム座談会

短期の里親が、 子どもを預かり家族を支援するために

場所：子どもの村福岡センターハウス

- 坂本雅子** SOS子どもの村 JAPAN 常務理事・小児科医。子どもショートステイの相談役です。
- 山元真哉** 子どもの村福岡の村長。みんなで里親プロジェクトの後方支援をしています。
- 永井里美** 子ども家庭支援センターの相談支援員。プロジェクトのリーダーです。
- 住田由香理** サポートスタッフ。「里親ひろめ隊」の活動を頑張っています。
- 堀純子** サポートスタッフ。「里親って?カフェ」での希望者と対話することで様々なことを教えてもらっています。



里親さんの短期預かりって、どんなもの？

永井 村での里親(育親)さんの短期預かりの実践を教えてください。

山元 村の一番の目的は、児童相談所から委託された里子を育てることですが、同時に、一時保護や子どもショートステイ、レスパイトなどの短期預かりもしています。特に子どもショートステイは福岡市内の区役所から依頼があり、最近増えています。

永井 特徴はありますか？

山元 まず子どもショートステイ事業はあまり知られていないと感じます。最近の特徴は、預かりが1~2日ではなく、長期の利用や繰り返しの利用が増えて

います。理由で多いのは、育児疲れです。

坂本 子どもの村福岡では、家庭的な環境で短期の預かりをしているのが特徴です。同じお子さんを同じ家で同じ育親やスタッフが預かるので、子どもにもご家族にも安心してもらえるようです。

預かりの依頼が増えている一方で…

坂本 申し込みは増えていますが、受け入れられたのはその半分にも満たないため、大きな課題と感じていました。そこで始まったのが、地域の里親さんが短期の預かりを担い、地域で支援をしていく「みんなで里親プロジェクト」です。

永井 家庭のニーズに応じて、「里親制度の中で支援を」という発想でショートステイに着目したのです。里親さんを増やすことは、地域の社会資源を増やすこと。里親さんは、さまざまな支援ができる地域の大切な資源であると信じて私たちは活動しています。

里親リクルート(募集)の取り組み

住田 里親チームは、プロジェクトの実働部隊で、リーダー(永井)とサポートスタッフ3名がいます。里



親についてひろく知らせる活動では、イベント(西区まるごと博物館、子育てフェスタなど)などにも出展しています。



里親関連図書の貸し出し



図書館でのPR

認知されていない里親制度をまず知ってもらうために、西区を中心にいろんな店舗、飲食店等でPR用のミニカードやチラシを置いてもらっています。広報の協力店舗を「里親ひろめ隊」と呼んでいます。



ミニカード

堀 子どもに関心がある方が会員である「福岡市ファミリー・サポート・センター」との連携も欠かせません。会員の研修後に時間をもらい、「里親ミニ講座」を開催しました。会員向け広報誌にチラシを入れてもらった時の反響も大きく、「里親って?カフェ」の参加につながりとても嬉しく思います。

「里親って?カフェ」や個別説明

住田 毎月1回は西区役所などで、希望者向けの説明会「里親って?カフェ」を開催しています。子どもの村福岡のこと、子家センや里親についてお話します。里親については、長い期間で子どもを育て上げるイメージを持つ方が多いので、まず短期の里親について丁寧に説明しています。

永井 子家セン(赤坂)に来ていただいて、個別相談も行っています。



里親って?カフェ



赤坂事務所



リクルートで大切にしていること

堀)カフェに参加される方は、共通して「子どものために自分に何ができるか?」を考えて参加されています。未来ある子どもを支えたいという意識を持った方たちです。私たちは、その方の気持ちを聴き、一緒に考え、できることがどんなことなのか?に目を凝らし、耳を澄ませています。地域にはいろんな場所にそういう方がたくさんおられるので、つながっていくことが大切だと思っています。さまざま目線で、みんなが子どものことを思う、そうやって社会が成り立ってほしいと思います。

坂本)私たちの活動は、里親さんを増やすだけでなく、地域とともに、みんなの思いを汲みながら活動しているのが特徴です。

永井)子家セン主催の公開研修会では、子どもや家族を取り巻く現状や課題について学ぶとともに、地域の中の子育ての協力者を広げるための研修と

いう意識をもって参加の声掛けをしています。一人ひとりのアクションの一押しになればと思います。



公開研修会

坂本)日本はまだ「自分の子どもは自分で」という意識が強く「預けるなんて」という意見も強いのですが、預けるご家族に対してみんなが寛容な地域をつくることも大事ですね。子どもをみんなで地域で育てていくという「子どもと家族にやさしい地域をつくる」ということは、誰にとってもやさしい地域になる



ことに繋がります。



村で短期の預かりを行ってみて

山元) 利用された保護者から「ぐっすり休むことができました」「子どもの成長を感じます」などの声を聴きます。繰り返しのお預かりでいつの間にか子どもは成長するのですね。その言葉にスタッフは励まされています。

永井) 保護者が育児疲れで体力的にも精神的にも余裕がない時は、一日でも数日でも、保護者は休息をとることができます。

山元) 村ではお預かりの時には、子どもへの褒める声かけを丁寧することを心掛けています。当たり前と思えることも意識して褒めるようにしています。子どもの村福岡では、一軒の家を「短期預かり専用」として、同時に1~2家族、3人くらいお預かりします。食事や入浴以外のスケジュールは自由なので、子どもたちは存分に遊ぶことができます。広い庭があり自然もいっぱい環境で、村の里子たちとも一緒に遊んでいます。

坂本) お預かりする子どもたちの好きな遊びや食事を聞いて、楽しく過ごせるようにしています。自宅での生活を大切にすることが大事ですが、歯磨きや入浴などの生活スキルを身につけることも大切にしています。個別に丁寧に関わることが子どもたちの成長につながります。



永井) 褒めるって大切ですね。子どもの成長を感じ、親も喜び、安心して預けられるということは本当に大切なことだと思います。相談やショートステイを入口として、社会資源や社会とのつながりが充実していくと嬉しいです。

みんなで里親プロジェクトのこれから 地域での試み 里親によるショートステイ

坂本) 子どもの村福岡の預かりだけでなく、地域の里親さんがショートステイの担い手になることは、普段の生活圏での預かりなので、通園・通学や友達との関係を続けながら過ごすことができるのが特徴です。また、生活圏にある子どもプラザや市民プールで遊んだり、近くの商店に買い物に行ったり、短期預かりの中でいろんな経験を広げることも大切です。

永井) 今は保護者と里親さんは直接会っていないのですが、子どもの成長を共に感じて喜びあう存在になっています。

里親さんと共に、子どもと家族を支える

坂本) 里親さんにチームが「寄り添っている」ことも大きな意味があります。短期であるからこそ、緊密に関わる必要があるとおもっています。

永井) 宿泊を伴う短い預かりなので、里親さん側にも不安や困り事がないよう、事前に確認して備えられることは準備しています。緊急時は保護者にもすぐ連絡します。私たち調整役は、里親さんと保護者

をつなぐ役割で、即応性が求められます。

坂本 日本の里親制度では、近年、「実家族を支援する」ことも求められるようになっていきます。

ショートステイでは育児疲れの方に「預け先まで連れてきてください」というのは、難しいことと思います。私たちは送迎の支援もしています。

子どもが地域で育つ中で、親だけでなくそれ以外の自分を大事にしてくれた大人と出会うことは子どもにとってこれから生きていく中で大きな力になります。家族にとっては、家族の孤立を防止する、実家に近い感覚で里親さんがいてくだされば、近所に住んでいるおじさん・おばさんのような存在として、だんだん関係性ができると、実家のような役割になってくるかもしれません。子どもにとって安心安全で、家庭が孤立しない地域になることが夢です。

永井 里親さんも、繰り返しのお預かりを経験して、「困っている家族のために自分の活動の幅を広げていきたい」と気持ちの変化があります。私たちが励まされエンパワメントされます。地域の里親によ

るショートステイでは、子どもの村福岡が後方支援をしています。何かあった時に、里親さん同士が、助け合う形が整えば理想と思っています。預けていんだという意識を家族も地域社会も持つことで、困った時も早い助けを求めることができる地域になることを願います。

坂本 イギリスでは「アーリーヘルプ」と言って、予防的な支援を大切にする仕組みになっていると聞きます。支援が遅れると家族の困難は増し、支援の専門性も必要になります。早い支援はみんなのできる支援です。

次号のニュースレターは、子家セン特集です！



みんなで里親チームと子家セン・センター長